

大阪百景

〈その③〉 アメリカ村

鶴井 通眞
(作家)

私はもう三十年近く大阪の周辺で人にあって取材し、文章にまとめる仕事を続けている。そういう取材を通じて、大阪の人のほぼ一人に一人ぐらいは、大阪に遊びに来た人にどこか大阪らしい所に案内して欲しいと催促されてもどこに連れて行けばいいのか分からないので困ることを、私は知っている。実際、どこに連れて行けばいいのか、私が自分で考えてもどことも思いつかないので、そう聞く度になるほどと納得したものだ。大阪には観光名所がない。そのことは大阪で生まれ育っているだけによくよく知り抜いている。

だが、そういう大阪にこの四、五年ばかりちょっとした異変がおきているようだ。私の弟は大学卒業後、旅行社に勤務して勤続三十年のベテランだが、私が今度の取材で仕入れた情報のウラをとるために久しぶりに東京本社に電話を入れて、この数年、大阪のアメリカ村が各地の中高生の修学旅行の人

気スポットになっていると聞いたが、それは本当なのか? 本当にだとすれば、それはいつ頃から始まつたことか? さらには一体どのあたりの中高生がアメリカ村曰当てに大阪に修学旅行にやって来たがっているのか? と訊いた。

「そつやな、もう長い間現場から離れてるんで、正確なことは分からんけど、アメリカ村が人気になってるのは知ってるよ。今、京都の人気が落ちてるし、神戸が震災で観光どころじゃないし、大阪でステイ(宿泊)する修学旅行が断然増えているのは確かやな。ちょっと待ってくれるか。大阪で修学旅行を受け入れてるセクションがあるので、そこでちょっと話を聞いてみるわ」ということで、しばらくして弟から電話が来た。「調べてみたんやが、どうも四、五年前ぐらいからそういうことになつたるみたいやな。もともと大阪には見るべき名所もないし、修学旅行で來ても自由行動するところもなかつた

から、大阪でステイしてもあんまり意味がなかつたんやね。

大阪城に生徒を連れて行って三時間ほど見学させて集合させて帰るというようなことしかできんかったんやな。大阪では。ところが海遊館ができて観光客に人気があるし、アメリカ村のショッピングは若い人に人気があるし、そこへ規制が緩和されたのか東京や大阪でも自由行動がとれるようになって修学旅行でもアメリカ村でショッピングができるようになったんで修学旅行の大坂ステイが断然増えたということらしいな。この間まで名古屋にいたから分かるけど、この頃では高校生や中学生でも一月、三月には卒業旅行とかいうて何人かで旅行に行くようやけど名古屋の場合はほぼ百パーセントがアメリカ村に行くようやな。それからどこから修学旅行に行くのかというのは関東からもいっぱい来てるといってた。関東、東海、中国、四国、九州というところかな。大阪はもう工業都市でも商業都市でもなくなつたから観光都市に変身したんかな」といって電話を切った。十年ばかり前、名古屋に骨を埋めると決意して名古屋の近郊に家を建てたとき、「名古屋の工業生産額が大阪を抜いたぞ。もう地盤沈下の大坂は『流の都市やな』と弟が私にいったのを私は思い出した。

だが、それでも弟ともそういうあつたのだが、私にしても弟にしても小さい頃からよくよく知り抜いている狹難でせせこましくゴミゴミと汚いばかりの大坂が観光都市だと冗談にもせよそんなことをいわれるのは、月が実は太陽だった

といわれるほどの驚天動地の大ショックなのだ。

私はかなり前からこのアメリカ村の誕生のいきさつを取材したいと狙っていた。(サブカルチャーから生まれた街)《資本の力抜きでできあがつた新しい街》といわれるこの街に興味があつたし、一九八五年つまり昭和六十年の前後三、四年ばかり私はアメリカ村のすぐ隣にオフィスのあった出版社に勤務し、毎日昼休みともなれば三日に一回ぐらいはアメリカ村で昼飯をとり、その帰りにシャツを買つたりネクタイやハンカチ、靴下を買つたりして遊んだものだった。

子どもの頃の記憶、中学校高校時代の記憶、そして大学を経て社会に出てからの記憶、私の書き物を読んだ人の何人かが私の記憶が確かに克明だと感心してくれたが、昭和六十年、一九八五年の前後のこの時期に限つて記憶があいまいでぼんやりしていく、時間的な経過がはつきりしない。それを昭和六十の前後だと特定できるのはその出版社に勤務を始めた直後、職場で忘年会が持たれ、その席で挨拶を求められた私が、「来年は昭和六十年です。学生時代、六十年安保に難兵として関わった者としては、もう一度六十年と名前のついた年にめぐりあえるのは不思議です。六十年を再現する程の気力も体力も残っていないせんが、せめてちょっとぐらいははりきつてみようかと考えています」と、喋ったのを記憶しているからだ。

それともう一つ記憶に残っている事件がある。山口組のト

ツブの座を継いだ竹中組長が殺害されたのがいつだったか忘れたが、竹中組長殺害の夜、竹中組長のボディーガードを務めていた南組の組長も狙撃され、殺害現場から南組の組事務所の近くまで戻り、アメリカ村の一角の八幡神社で「亡くなっていたのが翌朝発見されたが、私がその事件に遭遇したのはその数日後だったようだ。

土曜日の早朝だったと思う。七時前、それも一、三十分近くも前だったような気がする。そんなに朝早くから走りまわっていたのは、当時勤務していたアメリカ村のすぐ隣の出版社に私の引き受けた原稿を締切りギリギリのその早朝にオフィスに届けようとしていたからだった。徹夜でやっとやっとしあげたばかりの原稿をひっさげて、季節は冬だったのではなかつたか、よく晴れた朝で乾いて冷たい空気が締切りギリギリにすべりこもうとする気負いで上気した頬に心地よかつた。私は近鉄難波で降りて、駅から御堂筋を心斎橋に向けて歩いていた。おそらくその男性も近鉄難波で私の乗つて来た奈良からの快速急行を降りたのではないか。そして、その車内でも私と彼はすぐ近くの座席に座り合せ、その上偶然が重なって駅から五百メートルばかり私と彼は連れ立つて歩き続けたのだろう——しかし、ただそれだけでは彼はそれほどまでに思い詰めることもなかったろうから、おそらく彼が足を早めて私を抜き去ろうとするなどいうわけか私も歩を早め、彼が歩を緩めて私をやりすゝさせようとするとなぜか

ならばとつさのときに〈誤解〉などというもつてまわった言葉を使わないことに気づいたのではないだろうか。
「誤解もくそもあるかい」と吐きするようにいいながら段々につぶやくように声を小さくして最後は黙り込み、「チエツ、紛らわしい格好するな」といったと思うと、身を翻してさっさと立ち去つていった。身を翻す刹那に彼のブルゾンの内側につつこんだ右手が刃物をしまいなおすのが見てとれた。私に向かって紛らわしい格好をするなどといった彼は紺のブルゾンの下に黒いセーターを着、ブルージーンズに黒いスニーカーをはいている。そして、私は灰色のジャケットにブラックスーツ。どうか、アメリカ村の近くでは俗に〈鉄砲玉〉と呼ばれる人たちでさえもカジュアルなファッショントをお仕着せにするのかと、私は変に納得したものだった。

そんなことがあったが、私の務めた出版社は若い新しい会社で、例えば社長を社員の選挙で選ぶなど私がかつて勤務したことのある伝統的な会社とはかけ離れて新しいシステムで動いていた。そういう会社に務めながら、やはり大阪の若い人たちによって作り出されたという新しい街に足を伸ばし、この街がどのようなプロセスを経てできあがったのかいつかチャンスにめぐりあえば取材してみようと考えていた。そのチャンスが十年を経て、やっと巡つて来たのだ。

私は、大阪を日本でもっとも知られていない街だという気がする。例えば、盛り場にしても札幌のすすきの、仙台の東

一番丁、横浜の関内、伊勢佐木町、名古屋の栄、京都の四条河原町、神戸の三ノ宮、元町、広島の八丁堀、福岡の中洲といずれの街の盛り場も全国的に名前が通っているが、大阪の場合はどうことといって全国的に名前が知られた盛り場がないようだ。そんなわけで若い人に人気といつてもアメリカ村など聞いたこともないという人が日本では圧倒的に多數派だと思えるので、基本的なことをおさらいするとアメリカ村は住所をいえど大阪市中央区西心斎橋一丁目、二丁目。アクセスでいうと大阪駅から地下鉄四つ橋筋線で四つ橋駅下車。進行方向に向かって一番前の出口から出て左側にとり、高速道路をくぐると無印良品の店が見えるが、もうそこがアメリカ村の中心だ。

今度の取材で知ったのだが、今から三十年近く前その無印良品の店の向かい側にLOOPという喫茶店があり、無印良品の店からさらに進んで行くと左手にビッグステップという大きいビルがあるが、その向かい側あたりに石津謙介氏のVANの本社があつたのだそうだ。それがアメリカ村の発祥だというが、LOOPがここに店を開いたのは一九六九年七月十九日だ。

LOOPのオーナーの日隈萬里子さんの〈ジグソーパズルが解けた日——私の中のアメリカ村〉(愛するもののために)という一つの文章によれば「ループは自分で作った遊び場だった。一九六九年のある夜半、周防町を通っていた時、無性

私までもが同一歩調をとつてのろのろし始めたというようなこともあったのではあるまいか——あの朝、私は気がせいで一刻も早くオフィスにかけつけようとしていたのでぐずぐずするとは考えられないのだが、不思議な偶然のいたずらでいざれにせよ彼にそのような印象を与えたのではないか。私はオフィスにかけこんだあと手斧のことで頭がいっぱい彼のことにはまるで気づいていなかつた。日動火災のビルにさしかかったとき、私の脇でふいに強い気配がして、人が一人素早く動いた。はつと見てみると小柄でやせぎすの精悍な顔つきの男性がビルの壁に半身をピタッと寄せ、腰を低くひいて身構え、暗い表情から、「わしに何んの用じや」といながら紺のブルゾンの内側に右手を入れて、「ずうっとどこからどこまでつけて来る氣や」と私を睨みつけた。とつさのことに私は何のことだか分からずボカンとしていたが、このままでは危険だということだけは本能的に分かった。

「誤解です。原稿を届けに行くところです」と、それだけいながら全身から血の気がひいて行くのが分かった。「何が誤解じやい」といながら、相手はふつと怪訝そうに首を傾げた。
根拠も何もなくただ脚をガクガク震わせながら思ついただけのことだが、そのとき相手はどうも〈誤解〉という言葉にひつかつたのではないか。彼の懸念するような相手

にコーヒーが飲みたくなった。町はもう眠っている。時間に気兼ねせず、ふらりとコーヒーを飲みに寄れる気楽な場所がない……。いっそのこと好きな場所は自分で作ることにした。それがループ、なんでもない町に生まれたカフェ（愛するもののために）と、LOOPの誕生のいわれが明かされている。こうして生まれたLOOPは、近くに今は無きVANジャケットの会社があり、大学生活の延長のような社員が来てくれようになる。（中略）その頃のアメリカ村は小さなデザイン事務所や小さな印刷屋さん、LOOPの2階には大丸百貨店のデザイン事務所があった。ちょうど昔の東京の青山あたりの場所と似ていた。VANの社員の他は近所のただのおじさん連中がcoffeeを飲みに来てくれるだけで6時頃になると、とても静かになってしまいエリアだった。9月に入つたとたんアッという間にとてもおしゃれな学生達が来るようになった。わけがわからなかつたが、夏休みが終わる、皆学校に行きだすようになって、ファーと学生達のウフサが広まつたのだという。突然、嵐のように波がおし寄せて来た。本当に楽しかったが、良く動いたと思う（私の中のアメリカ村）こうしてまず若い人たちの支持を得たLOOPに日限さんの主人の親友のテリー篠原という人がサーフィンを持ち込んだのだった。

（主人とテリーと）一人でよくサーフィンにいっていた。その影響でサーフィン仲間がLOOPに集まり出した。その頃の主人の親友のテリー篠原という人がサーフィンを持ち込んだのだった。

や湘南はそれより後だと思います。海外から帰つて来たら又、大変、次から次へその話を聞きにサーファー達が集まつてくる。本場のファッショント、音楽、サーフボードを感じる為に、その頃サーフボードやTシャツを店に置いてあげるようになつたのは、古いボードを売りたい、中古のTシャツを売りたいという若い人のため。車まで売つてあげたと思う。（私の中のアメリカ村）と、ざつとこういったプロセスを経て一九七〇年の前後にアメリカ村の原形ができあがつたのだ。七〇年といえば、大阪は千里丘陵で開催されたエキスポ70に沸いた年だ。

「VANがあって、LOOPがあって、その一角は大阪でも一番進んだ街でした。横文字の職業の人々はみんなLOOPに集まつたんじゃないでしょうか。だから、そういう進んだ人ばかりの店に入るにはこわかったんですよ」と、その頃のLOOPにたむろしていた人が無国籍雑貨の「氣分屋雑貨店」の平井康祐さんであり、中古レコードの「キングコング」の回陽豊一さんだ。

「大学を卒業しても就職するのがいやな人が集まつて來たんです」と、回陽さんはこの界隈で中古のレコード店を開いた。大阪の一等地心斎橋からメインストリートの御堂筋をはさんで歩いて一、三分の距離のこのあたりは都心に位置しながら、もとはラブホテルなどが集中していたために地代は破格に安かつた。それで、若い人にもこのあたりの店や事務所は手が

は、VANの会社のきれいなファッショント、サーフィン好きのよこれたファッショント、音楽好きのヒップスタイル、もう皆が皆、おしゃれなのだけど、とても今、それを再現すると面白い光景だと思う。私達はとても忙しく働いていたので自然に音楽好きはレコードの係をしてくれたし、表でサーフボードをみがく人、車好き人間、学生のデイト組なんかも、それぞれが自分の部屋のように使ってくれていたと思う。そして、皆よく手伝ってくれた。ある学生なんて学校に行くよりLOOPに来るほうがよっぽど多かった。それぞれの分野のリーダーの集合場所になつていた。コンサートもやつと外國からアーティストが来るようになって、良くチケットの手配もした。その係は白藤丈二さん、カットはカットマン、皆手に入りにくいものを力を合わせて調達していた。そのエネルギーはすごかつた。コンサートのある日はすごかつた。そのアーティストにあわせたファッショントでまず集まる。ウエーと見いく。先発達が帰ってきたな！と思つたら、アッといふ間に店がどうしようもないほど人であふれるのである。そして、そのアーティストの音をガンガンかける。嵐のようないつも流れていった。

その内、テリー・ジェリーレッド、DEPTのコーディ達が本場のサーフィンをしに西海岸やハワイへ飛び出して行くようになる。ゆっくりとサーフィンブームがやってくる。日本で一番早くサーフィンしていたのはその人達だと思う。茅ヶ崎

届いたのだ。

「70年代は優雅な時代で大学に行つても仕方がないという連中でアメリカが好きな連中がアメリカに留学して、そこで面白いものがあると買って帰つてLOOPなんかで売ると面白いうように売れた」と平井さん。

平井康祐さんは神戸市の生れだが、もともとお父さんが大阪のど真ん中の道頓堀で洋服の布地や仕立てを商つていた。そんな関係で半分ぐらい大阪の血が流れていて、神戸に生まれ神戸の大学に通いながらLOOPの周辺に出入りし、その上夜間の洋裁学校にも通学していた。その傍らお父さんの仕事を手伝い、卒業後はパリで半年過ごし、戻つて来るなり、もうその頃にはいつからか、誰がいい始めたのか、アメリカ村と呼ばれていたこの一角に自分で作ったアパレルメーカーのマリアテレサクラブの事務所をオープンした。

「周りがみんな小売り店でしょ。それじゃ自分もみんなにわせてというので氣分屋雑貨店という店を出し、事務所は店の中におさめました」と平井さん。中古レコード店、雑貨店、中古衣料店、そしてそれまでは泳げる海に近い泉州でオープニングしていだサーフグッズ店が都心で地価の安いアメリカ村に進出し、これで役者が揃つたようだが、もう一つ初期アメリカ村を語る上で忘れないものがある。日本最初のイベント情報紙の「ブレイガイドジャーナル」は七一年、大阪の谷町六丁目で創刊されたが、その活動拠点の一つは初期アメリ

「トシヤーナル」(断片「ノーナン」)を倉干した本「アーヴィングに贈る」が、「アガ・ジャ誌」は七五年から三年ばかりはアメリカ村に本拠を移していた。

だが、就職するのがいやでアメリカ村に寄りつき、「商売つ氣はまるでなく、半ば趣味のように自分の氣にいった物を陳列するとそれが売れる」(回陽さん談)という時期はいつまでも続かない。やがてアメリカ村の商店の売り上げが目に見えて落ち始めた。その低迷傾向に歯止めをかけようとしたのが日限萬里子さんだった。日限さんは、アメリカ村の各店舗に「アメリカ村ユニオン」の結成を呼びかけた。それが八一年だった。

この日限さんの呼びかけに応え結成されたアメリカ村ユニオンは、五月の連休や、十月の御堂筋パレードにあわせて、アメリカ村の中心に位置する三角公園を舞台にトミーズやハイヒールなど吉本興行の若手メンバーの無料出演の応援を得て大々的なイベントを打ち、広く大阪市民にアメリカ村の存在を訴える一方頑固に自分流を貫いていた各店舗も時流にフィットさせる努力を追及し始めた。そして、その頃からこの街にはフォローの風が吹き続けるのだ。

初は日本全国どこででも売れるような物はアメリカ村では売れなかつたけれど、ビッグステップができてからはそんなこともなくなつたと回陽さん。つまり、アメリカ村が対象年齢層を広げ、商品を一般化し、アメリカ村そのものがより普遍化されたということだ。そしてその結果日本の広い地域に支持が広がつたのは分かるとしても、ますますいっそう若い人の街になつたのが何んとも面白い。

「アメリカ村は浪人、落ちこぼれの高校生、専門学校生の街でちゃんとした大学生はアメリカ村には寄りつかない。不良が文化を作ったんです」と平井さんがいえば、回陽さんが、「今でもアルバイトを募集しますと思いつ切り変わつたヘアースタイルの高校生とかが応募して来たりします。ここなら雇つてくれるやううとかいつてます。アメリカ村はかけこみ寺なんです」と応じた。

「昨年の阪神大震災のあと震災にあった神戸の高架下商店街などがアメリカ村に移つて来たりして、神戸の若い人がアメリカ村に流れて来ました。それが、最後のとどめになつたんでしょうね。この間、京都の四条河原町で店をやつてゐる友人に、最近どうやって訊いたらアメリカ村に食われてサッパリやつていつつましたね」と平井さん。やはりアメリカ村は目下全盛のようだ。

アメリカ村の一角のアロー・ホテルで「さあ亭」という居酒屋を営む正木清さんも、

「毎年春には福岡、広島、岡山、名古屋から女子大生が卒業旅行にやつて来て、このホテルに泊まつて行きます。東京から來たという人は知りませんが……」とアメリカ村の目下の全盛ぶりを裏づけた。

天神橋筋商店街で無国籍雑貨店を営む私の友人が——心斎橋筋には店を出せなかつた人たちが作ったアメリカ村に若い人がいっぱい押しかけて、その余勢で心斎橋筋にまで若い人がいっぱいあふれて行つた結果、対象の購買層と擦れ違つた老舗が撤退するケースが増えるという皮肉な結果が続出しているようだ——と、教えてくれた。その話を平井さんと回陽さんに伝えると、二人は即座に、「それは、相続税なんかの絡んだ念の深い話で、アメリカ村のせいではないでしょう」と軽く一蹴した。

無論、私にはどちらが正しいのか判断がつかないが、心斎橋筋については平井さんが面白い話をした。

「三角公園なんかにはほとんど裸同然の大胆なファッショングの女の子もよく見かけまして、この子はこんな格好でどうやつて帰るやううと余計な心配をしていると、それが心斎橋筋に溶け込むととんに消えてしまふんです」と、私が、着替えたんでしょうか?と訊くと、「まさか」ととりあわなかつた。

心斎橋筋には店を出せなかつたというアメリカ村の人たちにとっては今も心斎橋筋は畏敬の対象だということとか。

(つるい みちまさ)